

第29回東京女子医科大学神経懇話会

日 時：2007年1月30日（火）18:00～20:00

場 所：東京女子医科大学 総合外来センター5F 大会議室

一般演題

座長（神経内科）内山真一郎

1. 急性期脳梗塞症例の安静時筋交感神経活動

（¹神経内科, ²国立国際医療センター神経内科）宇羽野恵¹・國本雅也²・岩田 誠¹

2. 脳出血を繰り返した Cerebral amyloid angiopathy

（¹神経内科, ²第一病理学）武田貴裕¹・柴田亮行²・遠井素乃¹・
木村友美¹・内山真一郎¹・岩田 誠¹

3. フクチン遺伝子変異による軽微な筋力低下を伴う拡張型心筋症

（¹小児科, ²国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第一部）
村上てるみ^{1,2}・林由紀子²・野口 悟²・
小川 恵²・埜中征哉²・西野一三²・
大澤真木子¹

特別講演

座長（神経内科）岩田 誠

マリー病とは何だったのか？

（東京都神経科学総合研究所神経病理学）内原俊記

当番世話人：（東京女子医科大学神経内科）岩田 誠

共 催：東京女子医科大学神経懇話会・エーザイ（株）

1. 急性期脳梗塞症例の安静時筋交感神経活動

（¹神経内科, ²国立国際医療センター神経内科）
宇羽野恵¹・國本雅也²・岩田 誠¹〔目的〕急性期脳梗塞症例の安静時筋交感神経活動
(MSNA)を1分間の平均burst rate (BR)で検討した。〔方法〕急性期脳梗塞の10症例でマイクロニューロ
グラフィによりMSNAを導出し、安静時のBRを正
常対照群と比較した。2例では、慢性期に経過観察を
行った。〔対象〕急性期脳梗塞群は10症例。全例男性、年齢
49～78（平均63.0）歳。脳梗塞病型は、アテローム血栓
性4例、ラクナ5例、心原性脳塞栓1例。高血圧の合併
は6例。〔結果〕急性期脳梗塞群のBRは18.5～59.8/min（平均
41.9/min）で、正常対照群の回帰直線上に分布する傾向
にあった。経過観察の2例では、急性期から慢性期で安
静時BRは低下した。〔総括〕脳梗塞急性期には反応性の血圧上昇が知られ
ているが、本研究の結果では、安静時MSNAの亢進は認
めなかった。経過観察では、個体内で慢性期にBRの低
下が認められた。

2. 脳出血を繰り返した Cerebral amyloid angiopathy

（¹神経内科, ²第一病理学）武田貴裕¹・
柴田亮行²・遠井素乃¹・木村友美¹・
内山真一郎¹・岩田 誠¹症例は72歳男性、類症なし。歩行障害、視野異常を主
訴に近医を受診し、出血性脳梗塞と診断され加療した。
その後脳出血を繰り返し、3度目の出血の際に血腫除去
術が施行された。精査目的に当科に転院した。神経学的
には左同名半盲、超皮質性感覚性失語があった。頭部
MRI T2強調画像で両側後頭葉、左頭頂葉に低信号域と
高信号域があった。血腫除去術の際の検体を利用し病理
学的評価を施行した。血管の多くに無構造な細胞外器質
の増加と平滑筋細胞の減少があり、この構造物はCongo
red陽性、偏光顕微鏡で偏光像を呈し、免疫組織化学的
にAβ陽性、シスタチンC陽性、αSMA陰性、またAβ
により触媒される脂質過酸化ラジカル産物のHNE-
His、ONE-dGが一部陽性であった。シスタチンC陽性
のCerebral amyloid angiopathyは易出血性に関連する
というこれまでの報告に合致した。また血管壁の脆弱化
と酸化ストレスとの関連が示唆された。